

タイ映画「メナムの残照」の日タイ語の比較
(Comparison of the Japanese and Thai Languages in the Thai Film *Sunset at Chaophraya*)

チャヤパトラナン・ガン
Gunn Chaiyapatranun

82-373 Structure of the Japanese Language

1. はじめに

僕のプロジェクトは、「メナムの残照」というタイ映画の中の日タイ語の比較だ。この映画は、タイ国民によく知られている物語で、太平洋戦争時のタイ舞台に、小堀という日本人の軍人とアンスマリというタイ人の女性とのロマンスを描いた恋愛小説を映画化したものだ。タイ語には梵語の影響がたくさんあるし、日本語にはやはり中国語の影響がたくさんある。両方の言語とも、隣国の古い言語から強い影響を受けていたから、日本語を勉強する時に、両言語の色々な面白い点に気がついた。だからタイ語を選んで、日本語とタイ語の書記体系、発音、文法と尊敬語の同異を比較したい。この小説は十数回テレビドラマと映画にリメイクしたけど、2013年の映画版を使って、それから言語の違いを探すつもりだ。原文の作者はトマヤンティと言って、映画監督はキッチコーン・リャウシリクンだ。俳優たちはタイ語で話すときに日本語の字幕があるし、日本語で話すときにタイ語の字幕がある。だからこの映画は、このプロジェクトにとって、とても完全な資料だと思う。

2. 日タイ語の比較

2. 1. 日タイ語の書記体系と祖語の使い方。

まずは、日タイ語の書記体系と祖語の使い方だ。少なくとも両言語の書き言葉にとって、梵語がタイ語の祖語で、中国語は日本語の祖語と考える。ある梵語の言葉は長すぎるから、タイ語では全部書くけど、後ろの部分をよく発音しない。そして梵語には類義語がたくさんあるけど、ある言葉は普通に使う、他の言葉は名前とか詩的な場合にだけ使う。

(例 1) 19:40

じゃあ、アンスマリンとはどういう意味ですか。

อังศมลินแปลว่ายังไง

Angsumalin plae wa yang ngai

1 2 3

アンスマリンは どう 翻訳しますか。

1 3 2

アン〜はね、プラアティットという意味よ

อังศมลินแปลว่าพระอาทิตย์

Angsumalin plae wa phra athit

1 2 3 4

アンスマリンの 翻訳/意味は 太陽 様だ。

1 2 4 3

例えば、例1で女主人公のお母さんが小堀にAngsumalinの意味を説明する時に、PhraAthitと言った。両方とも太陽の意味だけど、前者は詩的な言い方で普通なタイ語のスピーカーは必ずしも分からないけど、後者は普通の言い方だ。Phraは様で、Athitは太陽という意味だ。Athitayaと書くけど、後ろの「ヤ」に小さい「 ́ 」の記号をつけて無声音になった。その上、梵語の子音は多すぎるから、タイ語では梵語の違う声音は違うの文字を書くけど、時々同じに発音する。例えば、タイ語では“T”の子音は六つの記号がある。子音は44個あるけど、実は音声は21個だけである。一つの音声の一番共通の記号以外の記号を使ったら、多分梵語から借りた言葉だ。日本語は音節文字だから、声音は有限だ。中国語から漢字を借りられるけど、発音は抽象化したから、同音異義語が他の言語と比べたら多い。誤解させないように、後ろに送り仮名をつけて、訓読みも使う。つまり、タイ語の発音は精密だから、長い言葉を削られるが、日本語の方は抽象的なので、追加の音声と祖語の中国語の元の書記体系を使わなくてはいけない。和製語もあるけど、漢字で書いたら、多分中国から借りた単語だ。

両言語には簡単な概念は自分の言葉を使って、もっと複雑なのは古い言語から借りる。日本語はほとんど漢字から来たから、魚とか水とか米などの簡単な言葉も漢字で書く。でもタイ語の書記体系は自分で生み出したから日本語より自分の言語で書ける言葉が多い。政府とか科学などの複雑な概念と太陽とか神などの歴史的や宗教的な概念は梵語の単語を使って、尊敬語もよく梵語から借りた。普通の動作とか体の部分とか物の名前などを梵語で使うのは、王室や僧侶について話すときだけだ。

(例 2) 14:10 (字幕・サントラ・ローマ字化・直訳)

食事を作るので、ご一緒にどうぞ。

เดี๋ยวแม่จะทำกับข้าวแล้ว ทานข้าวด้วยกันนะ

Diew mae ja tum gub khao laew than khao duai gun na

1 2 3 4 5 6 7 8 9

母(話し手)は すぐに 食事を 作る ので、ご一緒に ご飯を 食べましょう ね。

2 1 4 3 5 8 7 6 9

例えば、例2で女主人公のお母さんは一緒に昼食を食べるように小堀に尋ねた時に、Than（食べる）Khao（ご飯）DuaiGun（一緒に）と言った。このタイ語の文では梵語を一句でも使わなかった。でも日本語はほとんど漢字から来たから、食べるとかご飯などの簡単な言葉も漢字で書かなくてはいけない。両方の言語とも祖先の古い言語を尊重するために、原文の書き方は少なくとも書き言葉で守るけど、便利さと庶民的な日常語と適合できるように発音と使い方が変わった。これにもかかわらず、書き言葉の原始が見える。

2. 2. 日本語の尊敬語とタイ語の五つのレベルの丁寧さと助詞的な丁寧語。

次は日本語の尊敬語とタイ語の五つのレベルの丁寧さが何を重視するかということだ。前の例2のThanは普通の「食べる」じゃなくて、丁寧な言い方だ。タイでは言葉の丁寧さは特に大切だ。例えば、食べるという動詞は五つの丁寧さのレベルがある。主語の地位によって単語の選択が違う。Savoey（王族）Chan（僧侶）Than（丁寧）Gin（普通）Daek（無作法）は全部食べるという意味があるけど、使う場合は違う。自分の地位にも関わらず単語をこういうふうを選ぶ。でも日本語の場合は食べるの代わりに、召し上がるという尊敬語といただくという謙譲語がある。主語と聞き手の比較的な地位によって単語が違う。このことからタイ人は状況と地位中心で、日本人は関係、あるいは相対的な地位中心だと分かる。

(例 3) 14:15 (字幕・サントラ・ローマ字化・直訳)
お母さん、帰るそうよ。

คุณแม่คะเขาจะกลับแล้วคะ

Khun Mae ka khao ja glub laew ka

1 2 A 3 4 B

お母さん、(彼は) すぐ帰るそう ですよ。

2 1 3 4 B A

その上、タイ語には助詞的な丁寧語もある。例えば、例3の文では Ka 「คะ」という助詞的な丁寧語がある。この助詞は「です」や「-ます」の意味があるし、孤立で使うと、「はい」という意味もある。それに、イントネーションが変わったら、「คะ」は「よ」や「か」の意味になれる。これだけでなく、この助詞から話し手の性別も分かる。Ka は女性だけ使って、男性は Krap を使う。このような多面的な助詞は珍しいと思う。一方、日本語と比べたら、丁寧語、あるいは「ます」形の活用は時制によって違

う。例えば、「ます」形の過去形は「ました」で、否定形は「ません」で、厳しい規則がある。この理由のために、タイの丁寧語は日本のより学びやすく、微妙な意味合いをつけると考える。活用しなくても、どこでも使えるから、使用しやすい。文の最後につけるだけで丁寧になれる。

2. 3. 日タイ語の文化的見方の違い。

書記体系にとって、両言語はなるべく祖語の元の書き方は自分の書き言葉で守るから、自分の祖語を重んじると考える。両言語の尊敬語の使用が違うから、タイ語のスピーカーは地位中心で、日本人は関係中心そうだと考える。タイ語の丁寧語は日本語のより簡単だから、日常会話で「です」「ます」形よりよく使うと理論化した。

3. おわりに

前の例から両国人の色々な文化的見方も分かれる。少なくとも両言語の書き言葉にとって、書記体系から祖語の跡が見える。タイ語には無声音の記号や特別な子音を使ったら、梵語の単語だと分かって、日本語には漢字を見えると、中国語の言葉だと分かれる。比較のために、ラオス語は伝統的にタイ語の同じアルファベットを使うけど、共産主義化後自分のアルファベットを約した。子音を44個から21個になった。タイ人も読めるけど、ラオスの若者は自分の言語の単語と梵語から借りた言葉を区別できない。伝統的に自分の表音文字と漢字を使う韓国語にも同じように漢字が廃れていった。韓国の若者はハングルではどれの言葉は韓国のか、どれが中国語かも分からない。例えば、カムサハムニダの「カムサ」は実は「感謝」から借りた中国語だ。概して言えば、両言語とも古代文明の言語を尊重して書き言葉を保存するけど、発音から自分の文化特性を表現できた。それに、尊敬語にとって、両国の人とも社会の中の地位が大切だから、タイでは地位が中心で、日本語では話し手と聞き手の地位関係を重んじると考える。丁寧語と使い方は違うけど、両言語とも相手に尊敬することが大事だ。これらの類似点と相違点はとても面白いと思う。

資料(データの出典) : メナムの残照 (2013)

<https://www.dailymotion.com/video/x55exrf> 上半

<https://www.dailymotion.com/video/x55fler> 後半

参考文献 : タイロイヤルインスティテュートのウェブサイト <http://www.royin.go.th/>

中級の日本語 (教科書)